

何世紀もの間、ヨーロッパの君主と中国の王朝は、世界で最も人気があり入手困難な布である絹を使って宮廷飾ることでその富をひけらかした。人間が最初にカイコの繭の脆弱な糸をひねって絹を作ったのは、紀元前 4 千年紀、中国においてであった。他の天然布と比較して、絹は涼しくて流動的であり、布に織られると魅惑的な光沢が出る。絹のこれらの特性が貿易上の価値を高め、今もなおシルクロードとして知られている大陸間の貿易ルートを通じて現在のトルコからローマ帝国に次第に伝わり、アジアを中心に広がり始めた。カイコの栽培は 4 世紀に日本に伝わり、西ヨーロッパには 12 世紀までに伝わった。しかし、19 世紀後半には、フランスやイタリアといったヨーロッパの主要な絹生産国が、カイコと餌である桑の木の両方を脅かす病気に苦しんだ。ほぼ同時期に中国の絹の輸出は太平天国の乱により大部分が中止されていた。ヨーロッパの需要に応じて、絹の貿易業者は依然勢力を保っていた日本の絹産産を頼りにした。日本は 1868 年の明治維新の間に近代化が始まり、絹の生産は新政府の主要な利益源となった。20 世紀初頭までに、日本は世界で最大の絹生産国となり、生糸の 60% 近くを生産していた。

日本の急速な成長は、現在の群馬県と埼玉県内のイノベーションによって促進された。現在の群馬県と埼玉県には、田島弥平や高山長五郎といった多くの養蚕業の先駆者たちが住んでいた。1872 年と 1905 年にそれぞれ建設された富岡製糸場と荒船風穴は、日本の産業革命と拡大する絹糸産業の柱だった。荒船風穴でカイコの繭を冷やすことで、何ヶ月も孵化を遅らせることができ、富岡の大規模工場では年間を通して絹の生産を続けることができた。増産により、シルクは中流階級にとっても手頃な価格となった。世界の絹産産への影響が評価され、2014 年に富岡製糸場、田島弥平旧宅、高山社養蚕学校、荒船風穴がユネスコの世界遺産に登録された。日本はもはや絹の主要生産国ではないが、群馬と埼玉の保存された建物、遺跡、博物館は、絹製造が日本の発展に果たした重要な役割を示している。